慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	支那工業の現状に就いて（三、完）
Sub Title	
Author	及川, 恒忠
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.6 (1924. 6) ,p.858(94)- 875(111)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240601-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

置かねばならぬ。處が社會心理學の最近の進歩は、社會的進歩の基礎としての此快樂主義を根底から覆へして、その代りに人間が原始的第一次的に本有する幾多の本能乃至情緒が、人間社會なる機械組織を運行せしめる普遍的の動力であることを闡明した。夫れ等幾多の本能の中特に經濟生活上に重要義を有つものを擧げると、群居を好む本能、血族愛及家庭生活に關する本能、自由主張の本能、服從の本能、勞働及製作の本能、壓迫及屈從に對する反撥の本能、社會的同情の本能、相互扶助の本能、弱者擁護の本能等である。是れ等諸種の本能の中ム教授が最も力說して居るものは相互扶助の本能であつてそこに生ずる社會的協力現象は、從來の經濟學が偏重して來た競爭現象に增して、眞に經濟學の對象として重大なものであるとして、教授の比較經濟學乃至鄕土經濟學の基礎は一面之れに立ち、更にその提唱するコムミュナリズムの精神亦茲に發して居るのであるが本稿は其處に涉るの餘白なく、また教授は右の中特に血族愛及家庭生活に關する本能、勞働及製作に關する本能、服從及統卒の本能、社會的同情及弱者擁護に關する本能夫々に就て分類的の說をなして居るが詳細に紹介する程のこともない。（完）

支那工業の現狀に就て（三、完）

及川恒忠

（四）登錄工場の資本組織

農商部統計は工場の資本及び資本組織に就ては諸を缺如に付したり。此種の調査は本と極めて困難なればなり。元來各國の工業統計中最も信ず可らざるものは即ち資本の統計にして調査の時、工場主或は支配人は種々の猜疑を有し、往々眞相を以て人に示めすを肯せざるなり。資本組織に至りては、たゞ登錄せる工場のみ是を調査し得へし。然かも歷年の農商統計載する所甚だ簡なれば、茲に『支那の工業』が轉錄したる民國二年度の工業會社資本組織表に從ひ藉りて大概を知ることとせん（表中の工業は鑛業をも包括す）

（第十二表）登錄工場の資本組織（民、二年）

	株式	株式有限	合資	合資有限	未詳	總計
一萬元以下	一二	八六	二九	四七	八四	二五八
一萬元至五萬	六	八五	二六	一四	三九	一八〇
五萬元至十萬	一	二二	四	五	九	四一
十萬元至二十萬	—	二九	—	四	六	三九
二十萬元至五十萬	一	二三	一	—	二	一七
五十萬元至百萬	一	九	—	一	—	一一
百萬元以上	—	七	—	一	一	九
總計	二一	二六一	六〇	八二	一四一	五六五
資本總額	一、〇三九五二〇	三九二四四九〇五	一、一六五五七一	二、二九四五五一	五、五〇〇六一三	四九、八五七一六〇

（五）全國工業の概況

第十二表以前のものは皆工場に限りたり。茲に第十三表（A、B）を編して全國工業の概況を示さん。表中の製造戶數は工場及び舊式工業を包括して言ひたり。全國の職工は約一千萬にして其內男工五分の四を佔め、女工五分の一を佔む。

然れども工場職工は僅に總數の百分の六を佔むるに過ぎず（約六十一萬人）、則ち舊工業の重要なるを見る可し矣。

一年の出品總價格は十二億元にして、輸入せる工業品と較らぶるに、相差すること僅に二億余元に過ぎざるのみ（民國九年の輸入總額は約九億七千七百萬兩にして、內約百分の六十五は工業品たり）。支那の大を以て、毎年需要する所の工業品中、自ら造る者は百分の六十六に過ぎずして、給を外人に仰ぐものは乃ち百分の三十四に至る、亦驚く可し矣。表中の統計未だ必ずしも完備せず、然れども大體に於ては甚だ遠からざるなり。製造品の中、棉織物の價格最高にして、三億四千三百萬に達し、總價格の百分の二八、五を佔めたり。亦新工業の好現象たるなり。其の次は油、酒にして皆一億元以上にあり。絲茶は支那大宗の產品なれども、皆未だ列に入れず。

（第十三表A）　全國工業分類統計摘要（民、四年）

品目	製造戶數	男工	女工	男女工總數
油	二四七、七七四	一、二〇四、三四〇	四六、〇七三	一、三五〇、三八三
酒	一四七、一四四	七四八、〇五二	二三、七九二	七七一、八四四
糖	二七、九〇八	九一三、一三九	一九、八九九	九三三、〇三八
煙草	六四、八一一	二八一、六六〇	六三、七六五	三四五、四二五
粉	二一二、九六一	九一三、四六八	一二二、二二〇	一、〇三五、六八八
澱質類	三〇、〇三八	八八、三三三	七、三〇〇	九五、六三三
絲織物	三六、八〇六	二二、四八九	五六、二四七	一七八、七三六
綿織物	五八一、八七一	一、一五七、九四四	九五四、八四八	二、一一二、七九二
麻織物	七一、七三〇	八〇、二九一	一二〇、一九六	二〇〇、四八七
毛織物	五、四七八	五六、四七〇	一、四七八	五七、九四八
絲綿交織物	一、七三一	三四八二	七、四五五	七、五二五
羽物	一四八、六一五	二四、四〇一	三五、〇五八	五九、四五九
石鹼	七、〇〇一	一一、二六七	二、六一三	一三、八八五
臘燭	四三、九一一	一九一、九四八	七、九六八	一五九、九五二
漆液	八、九〇八	二六、九〇四	七六八	二七、六七二
蠟	九、二〇二	二五、八〇一	二、一八五	二七、九八六
染料	三五、三八八	六二一、一五六	二一、六二七	二四二、七八三
マッチ	四八二	七七、四一二	一四、二七三	九一、六八五
ガラス製品	七〇五	三、一六六	一、二四	三、二九〇
甎瓦	八三、二二一	六、六、六、七六七	一七、九七〇	七〇四、七三七
荷棒腦	二八六	八八七	一〇〇	九八七
紙類	五五、八六八	二、四、九八七	二三、五五一	二九八、五三八
皮革	二〇、〇一六	一九九、三八五	二、三三九	二〇一、七二四
化粧品	一、六三一	五、一七六	一、一六六	六、三四二
藥品	二、九五五	一七、七〇九	一五二	一三、八六一
陶磁器	一四一、六〇七	五〇九、一五五	三八、八九一	五四八、〇四六
漆器	二三、七三〇	一〇七、六五六	二、四四九	一一〇、一〇五
金銀製器	六九、一三九	三八四、六七六	一一、〇三九	三九五、七一五
眼鏡	五四八	二、二七八	一九	二、二九七
時計	一九二	一、二四〇	—	一、二四〇
雕琢器	七、〇六二	五三、六一九	六二六	五四、二四五

雜工品	二九五、六一四	七四一、一一三	四〇〇、八〇八	一、一四一、九二一	
計	二、三九四、三三四	八、六五六、三七七	二、一〇三、五九四	一〇、七五九、九七一	

（第十三表B）

品目	出品總量	出品總價額	輸出價額	輸入價額
油	七、九〇六、六七五、三五四斤	九八三、三九七	一、六九三、四〇一	四、六三八、一六七
酒	—	一〇四、九八二、六七九	一、八二一、二〇三	四四、七七九、〇八二
糖	四七二、七〇七、二四四斤	四六二、六七九	四、九九〇、八六一	九、三一〇、五四九
煙草	—	二、七二三、一〇六	—	—
澱粉	六九四、九三二、七九二斤	四六、五八〇、七六一	一、二六九、六七一	—
罐詰類	—	二二、九一一、一八五	—	—
絲織物	—	四〇、一二三、〇一六	—	—
綿織物	—	三四三、四六二、〇五七	二二五、〇二六、七八二	—
廢織物	—	一〇、六一一、四二四	—	—
毛織物	—	二、三三八、四四六	二四七、二五三	三、七三一、三九九
絲棉交織物	—	九〇四、八四九	—	—
編物	—	六、三六七、九二八	—	—
石鹼	—	四、六〇六、六五四	三一、一六三	三、四八六、四五八
臘燭	—	一八、四〇五、七〇一	—	—
漆液	三、二七六、四二二斤	二、一三〇、三八七	—	—
蠟	—	一、一三四、五二〇	—	—
染料	—	一七、〇三七、〇八五	—	二三四、四五三
マッチ	—	二三、三〇九、八一六	—	九、〇七六、〇五八
ガラス製品	—	二、〇三一、二五九	—	一、八二九、四二九
瓦	—	六二、一五〇、七三二	—	—
薄荷樟腦	—	三九八、八三五	—	—
紙類	—	五四、八六〇、七九五	六、三九一、五八〇	六、九五二、〇一六
皮革	—	六三、一三二、七二三	一、四一七、六八六	八、六二六、九三七
化粧品	—	一、一一二、三三三	—	—
藥品	二三六、九六八、八六八斤	二、三四二、二七八	—	—
陶磁器	—	一三、一二〇、七四三	三、八〇四、六六二	二、六三五、二七五
漆器	—	一五、六六七、一七六	—	—
金銀製器	—	九三、一九三、二〇五	—	—
眼鏡	七六六、七二七双	八一一、〇六〇	—	—
時計	六〇、六三〇個	三四七、九六六	—	八六八、九八〇
雕琢器	—	二、八〇六、一四一	—	—
雜工品	—	七一、七九六、四〇〇	—	—
總計	—	一、二〇〇、四〇三、〇三一	—	—

（六）在支外人の開設したる工場

馬關條約訂立されてより後、外人が支那に設立したる工場は逐年增加し、民國二年其數已に百六十六個に達したり。十八年中の進歩此の如く速かなる、驚く可し矣。左記第十四表は『最近支那經濟』に從つて摘錄せり。尤も民國二年の計算にして、此外、最近八年間に於ける外商の工場增設せられたるもの亦必ずや多かる可し。惜むらくは詳細の統計の參考に供す可きもの無きなり。

歐洲戰爭中には、日本人が山東、天津、上海等に增設したる工場甚だ多く、靑島の獨逸人工場

は幾ど全く日本人の佔有する所となりたり。單に青島及山東の日本人工場に就て論ずるも、其數已に百三十九にして資本皆極めて雄厚なり。今膠濟鐵路の買戻しに期あり、青島將に復た我が有たらんとす。然かも經濟勢力は恐らく日本人の終ひに刼留する所たるを免れざる可く、之れ亦國人の當に早く之が爲めに計る可き所のものなり。一九二一年三月の遠東時報は日本治下の山東に於ける外支工場の詳細なる調査を載せたりしが、是れによれば日本工場百三十九、支那工場九十三、米人工場二なり。他處の日本人工場は確數なしと雖も、紡績工場の一項に就て言ふに、上海には日本人工場二十二あり、青島に三（上述の工場數に包括せらる）、天津、漢口等に四ありて、總數は實に二十九個なり（民國九年、華商紗廠聯合會の中國紗廠一覽表に見ゆ）。民國二年度に外人の有したる紡績工場は十家にして過ぎざりしが、今、日本人竟に獨り二十九家を有す、他種工業に於ける日本人の發展亦必ず甚大なるや推して知る可し。吾人苟くも自ら奮作せずんば、他國資本家の勢力將に關中に滿佈し、政權未だ失はれずして、先づ經濟奴隸たらん

（第十四表）　在支外人の工場

蛋白質	九	煉瓦	九
化學用品	一	棉紡織	一〇
造船及機械	二二	麵粉	一七
家具	六	瓦斯	四
製氷及冷藏	九	纖工	一
製革	六	油業	一三
製銅	一	石鹼及臘燭	一二
製糖	三	煙草	九
羊毛淨壓	一二	雜業	二二
合計	一六六		

（七）　重要品の輸出入統計

輸出入統計にして十中九まで工業と關係を有するは、蓋し工業原料たるに非ずして即ち工業製造品と爲す。而して輸出たると輸入たるとに論なく、均しく一國の工業盛衰の狀況を見るに足るなり。茲には僅に最重要なるもの四種を擇らびて之を言はん。

第一、機械の輸入（第二圖參看）

光緒十三年より始まりて民國九年に至る三十四年間を通覽すれば、其趨勢は極めて工業時期の變遷を表現するに足る。十三年より二十年に至る時期は官督商辦時期にして、平均輸入額も亦最も低くし。二十一年馬關條約成りて外人企業時期に入るや、略ぼ高く、二十八年聯合軍入京の影響を受けて大に降れり。二十九年より宣統三年に至りては政府奬勵の時期にして、繼いて長く增高し、民國元年に至りて革命の影響に因り略ぼ跌ち、遂ひに自動發展期に入りて漸く昇れり。民國四年歐洲戰爭の各國が機械の出境を禁止したるの影響を受け、再び跌ち、民國七年以後歐洲戰爭終を告げたるにより、三年間に於て漲りて原額の五倍有余に至り、民國九年の總額は實に三千三百萬元に達したり。圖中の弧線は霄漢に直入し、海上の通商以來、未だ有らざるの速度なり。其中の一大部分は勿論數年來既に購買を訂約し、禁令に因りて未だ出境し得ざりし積貨なれども、然かも工業發達の量亦之に由て其大概を得可く、其中紡績機を以て最多と爲すなり。

第二、蠶絲、第三　綢緞、第四　陶磁器

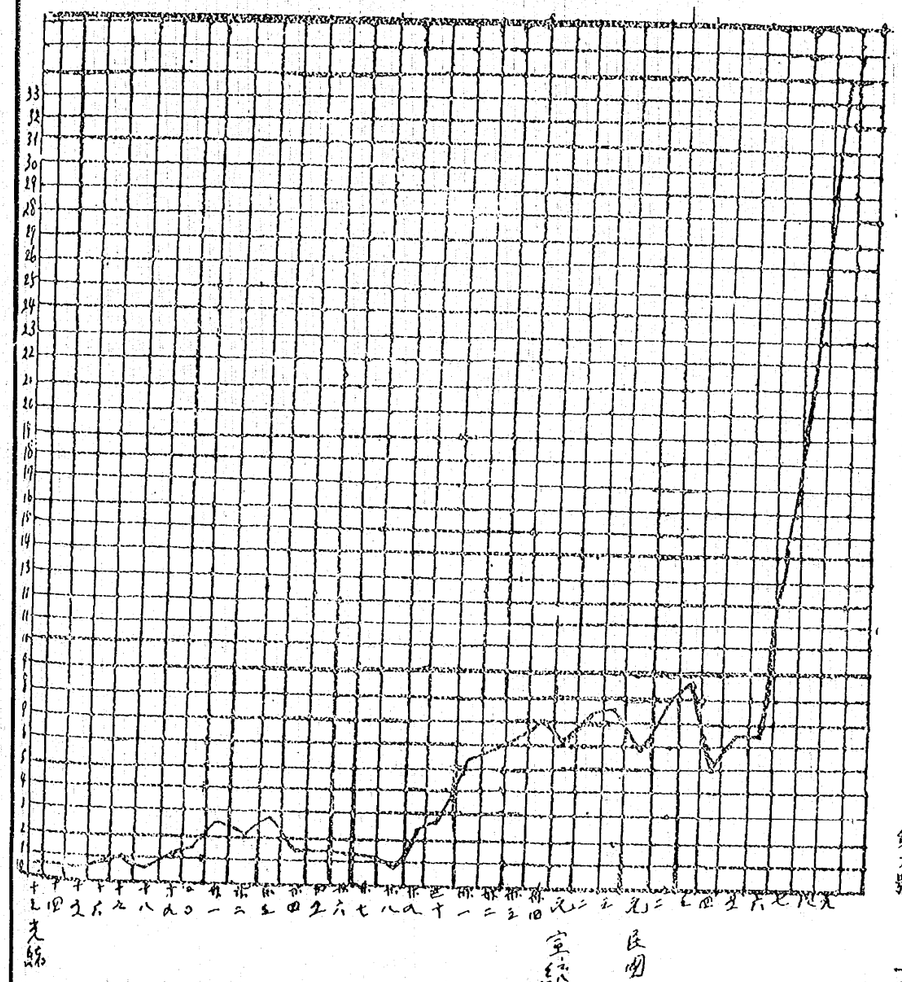
（第十五表參看）

四十五年中絲綢の輸出は皆漸を逐ふて增加し、甚だ喜ぶ可きに似たり。然れども世界市場に於ける貿易數の增加最も速かにして支那の絲綢は世界市場供給の百分數に在りては反て年々退歩あり。絲を以て論ずるに一八八〇年より一八九〇年に至る十年間に在りて、支那は世界

第　二　圖

最近三十四年間に於ける機械輸入

（百萬海關兩を單位とす）



總額の百分の四十を佔めたり。が、一九一四年已に降りて百分の二五・九に至り、殆ど半數を削減したり。然るに日本は同一時期に在りて、百分の十四より百分の四四・五に至る（科學雜誌三卷三期、著者作る所の『中國の實業』參看）。人進み我れ退く、得失相較らぶるにかくの如く其れ巨なり。

四十五年來支那の輸出增加は實は世界の工商業興盛の賜にして、支那工商界が努力して之を得たるに非らず、則ち他日、人愈々進めば支那の輸出額亦必ずや日に減ずるの勢あらん。食人唾余、且つ坐して之れを待つ、誠に恥ず可し矣。

陶磁器の輸出增加は多からず、たゞ民國七年より九年に至る三年間は驟かに增して殆ど原額の二倍余となれり。當さに亦戰後商業恢復し、需要驟かに增したるの致せし所也。飜て每年輸入する所の陶磁器增加の速度は、亦驚く可きものにして、民國六年の輸出入は幾と相等しきも輸入は大低日本磁なり。窯工、精を求めずして、國人の嗜好は日に西化に趨く、是亦工業界の當さに注意す可きものたり。以上三種の輸出入統計は皆比較圖を附したり（第三、四、五圖參看）

（第十五表）　重要工業品の對外貿易消長

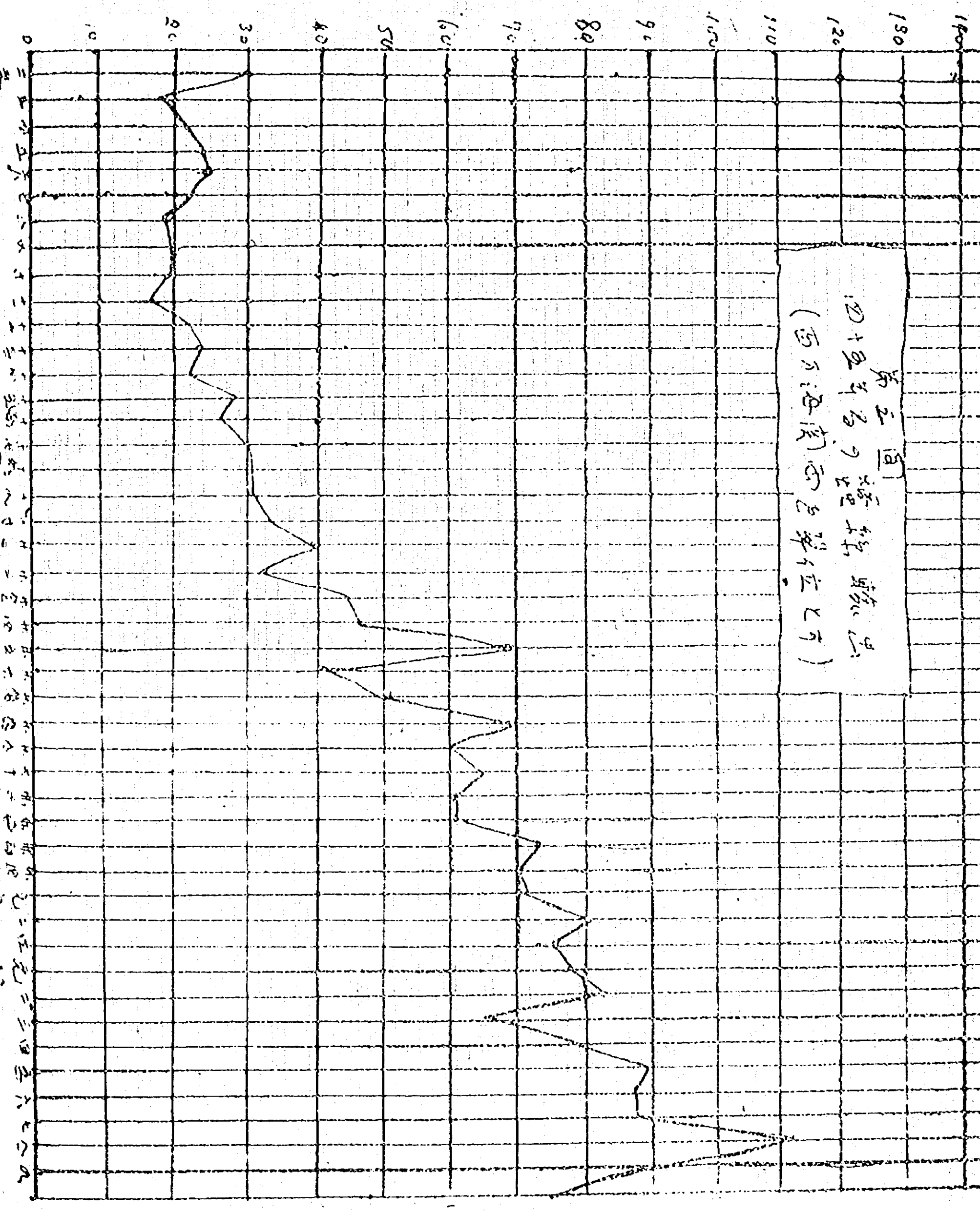
西曆	蠶絲	綢緞輸出	綢緞輸入	陶磁器輸出	陶磁器輸入
一八七六	三一、六五三、九〇〇	四、一五八、四三八	一、七六四	四七一、四五一	—
一八七七	一八、一三四、三七二	四、六二〇、二九六	四〇二、一一一	—	—
一八七八	二〇、三七六、二三七	四、七四九、九六七	六、七七七	五八四 五〇一	—
一八七九	二三、八七二、二三七	四、七四九、九四五	六、一八七	四九一、六八三	—
一八八〇	二四、一七九、七五六	五、六五五、四八八	五、三七二	五四八、七〇六	—

一八八一	二二、〇一七、〇〇六	四、八五一、一九四	八、〇一〇	五八四、五〇一	—
一八八二	一八、八九八、九五〇	三、九三八、三 二	六、七二五	七〇六、一四九	—
一八八三	一九、二五八、四六九	四、六七九、四二七	五、二八七	五三八、四六〇	—
一八八四	一八、三〇五、八二二	四、八七六、五一九	五、五五四	四五四、八五三	—
一八八五	一五、二〇一、九四六	四、七四五、七二九	六、四七四	四八六、〇七二	—
一八八六	二一、八三二、五三〇	七、〇〇二、三一三	六、六〇五	四八九、五一三	—
一八八七	二四、六〇七、五二八	七、〇八二、六八六	—	一、四〇四、六三八	—
一八八八	二三、七六五、四六七	八、四一四、八三一	—	一、〇九〇、〇二二	—
一八八九	二八、六四二、四一八	七、七五九、五四九	—	一、〇九九、九九八	—
一八九〇	二四、四九一、三七〇	五、七六四、五三五	—	五九二、四九八	—
一八九一	二九、八八四、三七五	七、〇一七、六五一	—	一、一七三、七三一	—
一八九二	三〇、三四一、一一三	七、九五一、〇一七	—	一、四三二、七六六	—
一八九三	二九、三二六、一五五	八、七八八、〇七〇	—	一、五七二 八七四	—
一八九四	三三、六〇四、二九一	九、〇四〇、二九一	—	一、六二六、一四九	—
一八九五	三九、七二三、八七一	一一、九六三、二三一	二〇七、六九六	一、九八三、五四三	四六、八九四
一八九六	三一、六七一、五四〇	一〇、四一七、七九五	二三三、七一〇	二、〇一九、五六四	六五、五三四
一八九七	四四、四六〇、九九〇	一〇、七八九、六七〇	二八〇、八四八	一、七三五、一三二	一五一、五五四
一八九八	四五、四一二、八一八	一〇、六九一、一〇一	三二七、二二四	一、九三四、一九二	一三二、一七四
一八九九	七一、五八二、八四九	一〇、五二六、五二一	四六一、九七七	二、二三二、五二七	一八四、〇一二
一九〇〇	三九、七三三、〇三一	九、七一一、八三八	六五七、三六四	一、九九九、四七一	一〇五、八九二
一九〇一	五〇、〇二七、二八二	一〇、八八八、三三八	七五七、八六〇	二、〇九〇、八四六	六一、一二八
一九〇二	六八、九九四、一四〇	一〇、二五八、〇六七	四一四、二四九	二、二九四、七七二	一五五、三四九
一九〇三	五九、三三四、七五八	一四、九五四、九四九	八四五、八三五	二、六九六、七〇三	三〇五、九六八
一九〇四	六五、六八七、三〇二	一二、五六八、一一〇	九九一、五四二	二、〇五九、九九二	二九八、五三四
一九〇五	五九、六一四、一〇二	一〇、七七九、七三一	一、〇〇九、〇二八	二、〇五五、九四二	五三六、八九八
一九〇六	六〇、四三六、〇六一	一〇、八五九、四一四	一、六九三、八九八	一、九一八、九〇六	五六四、二五七
一九〇七	七五、二〇二、九七五	一三、八八一、〇七九	一、九〇一、四五一	一、九八三、五六三	五三三、五四三
一九〇八	六八、三三四、三四七	一四、五八〇、〇一七	一、二七〇、九一七	二、〇〇二、九七八	三九九、〇五一
一九〇九	七一、一五四、三六四	一八、八六六、九〇七	一、二五八、五九八	二、二二七、九九〇	四六八、九三八
一九一〇	八〇、三二六、六八八	九、〇七二、三四〇	一、七六四、二五〇	二、三六一、一七二	六八六、五四六
一九一一	七四、五〇九、六八四	一八、一六五、九四八	一、六九七、一八四	二、三六四、九二七	七七二、〇一二
一九一二	七六、五四四、六四〇	一七、〇一三、〇〇一	一、二七〇、三〇九	二、三一一、七二六	八一五、七七一
一九一三	八三、一五六、二八二	二一、七八一、五三二	一、七四二、四一八	二、五〇四、五三八	一、二一〇、八三三
一九一四	六二、九一九、二四六	一七、〇七一、八三四	二、五二〇、八四一	二、三四九、二一九	一、〇四二、八六七
一九一五	七四、四〇六、四七六	二二、三九三、二四三	一、六五二、〇六五	二、九九五、〇二五	七七九、五九一
一九一六	九〇、〇四二、一五二	二〇、九七五、二八八	二、〇二一、三〇八	一、七八七、三九九	九六七、五一五
一九一七	八六、〇八八、二五〇	一七、九八七、四四五	二、五二三、三六〇	一、五一三、四一三	一、三一八、〇三七
一九一八	八七、六四三、五六一	二〇、五〇二、六四一	二、七二五、〇〇五	二、五八五、九四一	一、二五八、九〇五
一九一九	一一三、九五七、九〇八	二六、一九四、六三六	二、九六九、二二八	五、〇八三、五〇五	一、二九一、七四八
一九二〇	七六、九九八、三六〇	二八、一三八、五四四	二、二四〇、四七二	六、〇九六、九一七	九六五、四二四

備考（本表は中國商戰失敗史及び一九一九年一九二〇——一年 Y.B.より摘錄したり）

四、支那工業の位置と前途

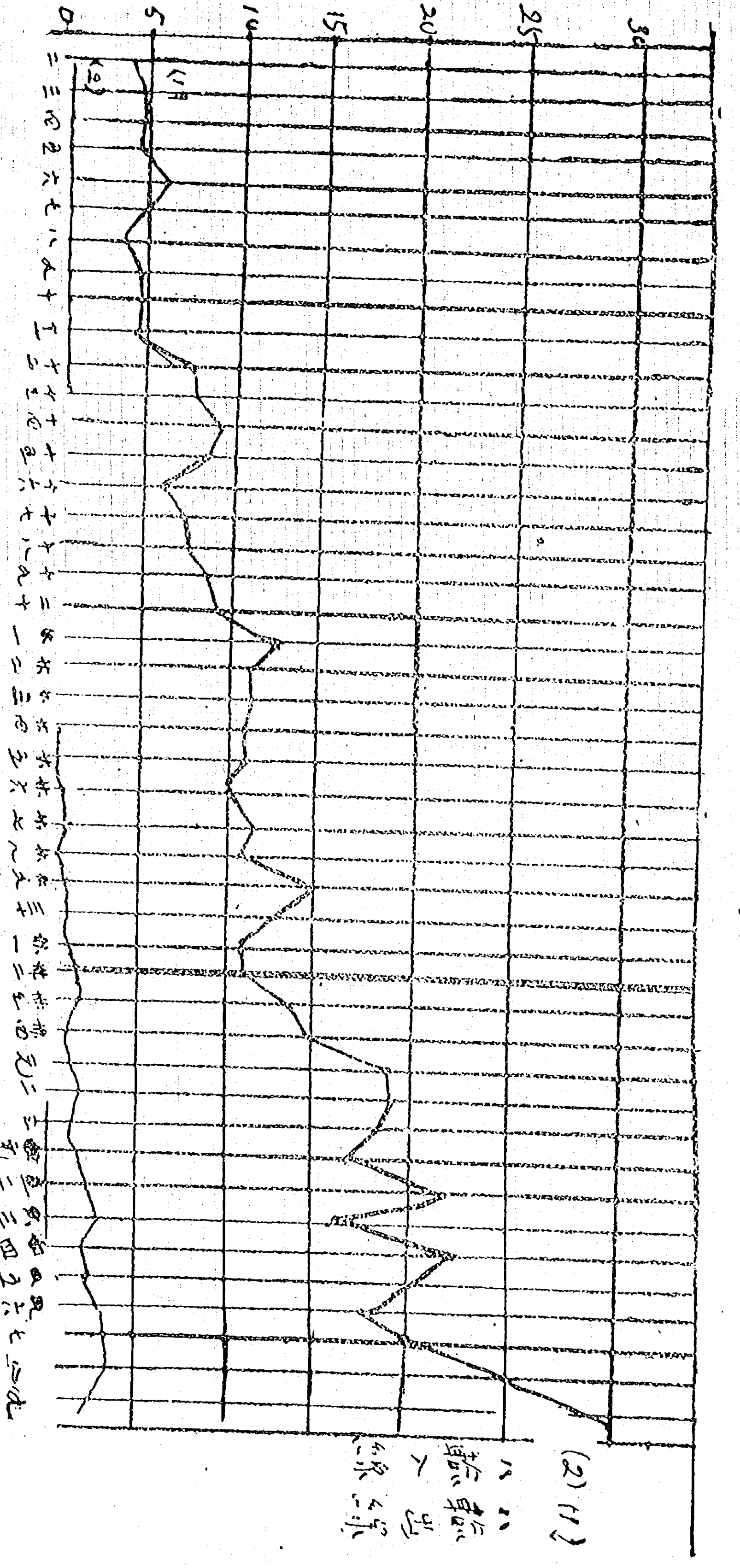
過去五十年間、支那の工業は無進歩なりと謂ふ可らざるも、其行や迂緩なり。軍用工業時代は國人猶ほ夢中に在りたれば、置いて論せず、官督商辨より政府奬勵の三時期の若きは、官の上に倡するも社會退縮して前まず、故に其効甚だ



第四圖

四十五年間の綿絲輸出入

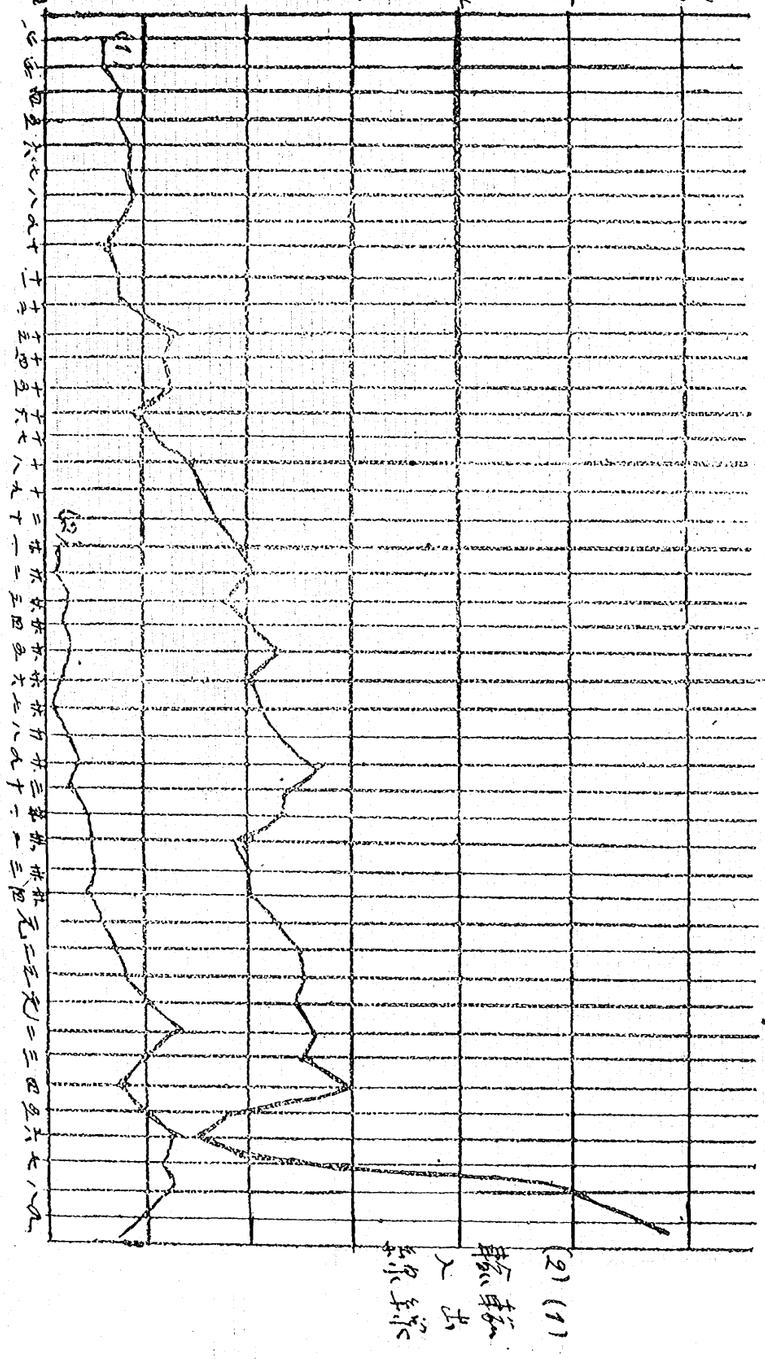
（百萬海關兩を以て單位とす）



第　五　圖

四十五年間の陶磁器輸出入

（百萬海關兩を單位とす）



微なかりき。自動發展期に至りて社會覺悟あるに似たりしも、官吏軍人又從て之を撓め、之を抑え、其効猶ほ大ならざるなり。清末は官、賢にして民、不肖民國は民賢にして官不肖、支那の政府と國民とは工業に對して遂ひに一日も通力合作したることなく、五十年の光陰は草々にして過ぎたり矣。此時期に在りて日本は島國より世界一等の富强地位に躍登し、支那は輸出額尙ほ輸入額と相低する能はず、亦大に憐む可し。五年、歐州戰爭に際し、天は支那に與ふるに自ら新にするの機を以てしたるに、又政爭自擾して虛しく度りぬ。今試みに支那工業と日米工業とを簡單に比較せんか、支那工業の處するところを知るに足らん。

	日本	支那	米國
人口	五六、〇七〇、九二六	四三九、四二五、〇〇〇	一〇五、二五三、三〇〇
面積	一四八、七五六	四、二七八、三五二	二、九七〇、一三八
工場或製造戶數	二一〇、九六六	二、三九四、三三七	二七五、七九一
職工	一、二八〇、九六四	一〇、七五九、九七一	一〇、六五八、八八一
製品總價額	一、八六七、〇〇〇、〇〇〇圓	一、二〇〇、四三〇、〇三一元	四、一四六、四七五、〇〇〇弗
調査年號	一九一七年	一九一五年	一九一五年

支那の人口は日本に八倍し、米國に四倍し、面積は日本に四十倍し、米國に較らぶるに約四と三の比なり。而して製品價額は價に日本の百分の六十、米國の百分の五に及ぶのみ、工業の發達せざる尙ほ道里を以て計ふ可きか。更らに職工數に就て言ふに、支那は日本に九倍し、米國とは相等しきも、而かも生産の懸殊かくの如く其れ遠く、人力の不經濟又見る可し。其故果して安

ずこにか在る。曰く支那の工業は資本太だ少く、組織太だ幼稚なればなり。試みに製造單位の數に就て比較するに、支那の單位は平均六人に過ぎず、則ち支那は尙ほ家內工業時代に在るを知るなり。機械は僅に少數の新式工場が有するのみにして、大規模の組織も職工を用ゆる一萬人以上のものは竟ひに聞く無し。一、二人の五官心思、數十工人の手足と體力とを恃みて、東西の科學的組織と數千馬力の機械とに相競爭するも、烏くんぞ得で敗れざらんや。故に支那の工業不進步の原因に三あり。（一）資本少なきこと（二）組織小なること（三）管理法を得ざることなり。論者或は罪を支那人の自大思想及保守主義に歸すれども、確論に非ず。吾輩を以て看れば、今日の思想にして最も支那實業の障礙を爲すに足るものは、投機心に過ぎたるは莫し。何人たるに論なく、何業たるに論なく、苟くも其人にして日日業外の名に沽ひ、業外の理を謀らば、其業や必ず敗れん。而して況んや實事求是の工業をや。然り而して今の軍人政客、失勢すれば工場を企劃して曰ふ、吾れ將に實業を以て國を救はんと。既に工場を企劃すれば、朝開會し、暮投機し、而して明日は又官となり、工場は遂ひに傳舍となるなり。工場を本業とする者も、宜しく一業に專心す可きに、外國替爲と取式所とより分外の財を所得せんことを思ひ、工場未だ虧たずして遂に投機に由りて倒閉す。故に吾輩は敢て曰ふ、自大思想と保守主義は決して支那工業の患と爲すに足らず、資本の缺乏、組織、管理の不良も亦補救の法あり、たゞ投機心は乃ち奈何ともす可らずと。資本少きも、苟しくも事に任するに人を得、信用昭著なれば、資本自ら之に趨くこと歸するが如し。組織と管理の學識は虛心之を求むれば亦得るに難からず、たゞ工場を業とする者、分に安じ心を專にし、工業を以て終身の事業と爲さば、工業必ずや興盛の一日あらん。孔子言ふあり、『人而無恒。不可以作巫醫』と。西諺亦曰ふ『久しく轉する石は苔を聚む能はず』と。未だ聞かず、官吏たる。卡尼基（ペンニッチ？）あるを。亦聞かず、工場を開辦するウイルソンを。二十世紀は人材專門の時代たり。願くは工業家は本業に專心し、軍政界の偉人は己が職を勤修し、工業界の乾淨土を汚さざらんことを。然る後乃ち工業を振興するの路亦至つて簡なり。工業を振興するの道を言ふ可きなり。工業を振興作し、凡そ工業を妨礙する法令制度は皆革除す可きこと。（二）工業組織を大にす可きこと。則ち資本と人材の經濟を得可く、多量製造の益を得可し。（三）機械を製造する工場を多く設くること。機械は工業最要の資本にして、孫逸仙も亦機械借欵の議を有つたり。然かも支那は石炭鐵を有す。人の供給に仰がんよりは退いて自ら造るに如かず。僅に基本の機械を購へば、即ち能く源々として各業の需要に供給することを得るなり、今や關稅修正の機會あり、各國は支那の通商上の待遇に對し、將に漸く平等に趨かんとす、此れ正に吾人が外國貿易に發展するの日にして、工業の革新は更らに緩を容れざるなり。自動發展時期の後、若し之に繼ぐに全國一致を以てせば、吾輩は知る、支那工業史上の黃金時代は立致ずるに難からざるを

（原文は終りに最近六十間の工業大事年表を附したれども今は省略に附したり）